

MINDAN



脱北者支援 Report

編集・発行 = 脱北者支援民団センター TEL:03-3454-5811(FAX兼) e-mail : sien@mindan.org



脱北し先に日本へ入国していた息子と再会する母親

脱北・日本入国の流れ、いぜん止まらず

～今年に入って約10人が入国～

59年から始まった北送事業で北韓に渡り、厳しい差別と抑圧、そして慢性的な食糧不足から飢餓状態に陥り、北韓を脱出して日本に入国する流れが依然止まらない。今年に入って、7月までにすでに日本人妻を含めた在日同胞ら約10人が、日本へ戻ってきた。

脱北者の日本入国は、96年に在日同胞の男性(50歳代)が、飢餓から逃れるために中国へ脱出し日本の公館へ駆け込み、日本へ入国したことが第1号。以来、累計で約100人に上る。

報道によれば中国の各国公館に駆け込む脱北者はあとを絶たず、増加の一途を辿っており、韓国行きを希望する人が多いなか、日本へ帰ることを希望する在日同胞や日本人妻がいる可

能性も否定できない。このような状況の中で関係者らは、日本へ入国する脱北者はこれからも増加すると見ている。

無一文のまま日本へ入国した彼らは、日本に身内がない場合が多く、また身内がいても「一切、関わりたくない」ということも少なくなない。日本へ入国した彼らを受け入れる公的な機関や体制はいまだに確立されておらず、住居・就職・日本語教育・日常生活の指導などの支援を市民団体と連携しながら当支援センターが行っている。

支援センターでは、これからも増え続ける脱北者への支援を続けていくが、幅広く温かいご支援を呼びかけている。

初のボウリング体験に歓声

～ 第5回在日脱北者交流会を開催～

脱北者支援民団センターは8月6日、関西地区に在住する在日同胞を激励するために大阪市内のボウリング場で交流会を開催した。7月下旬に帰日し、まだ住所が定まっていない在日同胞の親子2人をはじめ、日頃脱北者の支援に携わる民団関係者や市民団体の方々を含め20余人が集まりボウリングを楽しんだ。

脱北者らは、初めてのボウリング体験に戸惑いながらもストライクが出るたびに歓声をあげながら日頃の就労や夜間中学での勉強などのストレスを解消していた。

一方、関東地区の「交流会」も、7月9日に都内の公園で民団や市民団体の関係者を含め50余人が参加して開かれ、バーベキューを楽しみながら旧交をあたためた。

都内で行政書士事務所を開業している崔聖植さん(民団板橋支団長)は「無国籍」の状態に悩んでいる脱北者ら数人からの相談にこたえ



都内で行われた脱北者交流会の様子

ながら、同じ歴史を刻んできた在日同胞としてこれからも出来る限りの支援を続けていきたいと語っていた。同交流会は、支援センターが発足して以来、関東・関西地区に分かれて半年毎に開催しており、今回がそれぞれ5回目。脱北者らが日本社会のなかで孤立していることや北韓にいる親族へのつる想いなどによるストレスの解消に役立っている。また、脱北者を支援するNGOの紹介や生活相談の場にもなっている。

素顔で北韓の生活を訴え

～ 東京本部本国研修会～

脱北者支援の理解を広げようと民団東京本部(李時香団長)は、6月21日から済州道で開催した本国研修会で、在日同胞の脱北者を招いて講演会を行った。

金民子さん(仮名)は、日本での貧しかった生活の中で、「朝鮮に行けば父親の病気を無料で治せる。などの甘言にのり、「地上の楽園」という謳い文句を信じて北韓に渡った。しかし現実、病気を治すことはおろか、知人が餓死したことや在日同胞帰国者が進学・就職するうえでの差別、脱北に成功するまでの苦労などを詳細に語った。

約30年ぶりに日本に帰ってきた当初、昔住ん

でいた街並みがかわっていたので非常に驚いたこと、銀行でお金を預ける際にキャッシュカードの使い方が分からず、知り合いに頼んで教えてもらったこと、生活をするうえでゴミの分別方法と出す曜日が決まっていることを知らず、管理人に怒られたと赤裸々に語った。

金さんは、脱北者に対する東京本部幹部らの暖かい支援を訴えた。



素顔で訴える金民子氏

日本入国後、衣食住に困窮—公的支援の必要訴え

～脱北者インタビュー～

北韓から脱出し、日本に戻ってきた北送同胞の徐京美さん(仮名)に対して、日本から北韓へ行った経緯、北韓での生活、脱北したきっかけ、日本での生活上困っていることなどを聞いた。

父の病気が治せると甘言にのせられ

日本で生活状況はとても貧しかった。4人兄弟が朝鮮学校に通うための学費がとても高いため両親は共働きをしながら生活費を稼いでいたが、親戚からも援助を受けている状態だった。ところが突然、父親が病気になり手術費用が出せず、朝鮮総連による「地上の楽園」の北韓へ行けば無料で治せるといふ甘言に乗り、両親が北韓行きを決意した。

北韓での生活にびっくり

北韓に着いてははじめは招待所というところで集団生活をし、1ヵ月ほどして一軒家に移動した。ご飯を炊く時に水は井戸から水を汲み、火は石炭を焚いていたことに非常に驚いた。引っ越しをしてから数日後に学校に通うようになったが、その学校に通う帰国者は自分たちの兄弟だけだったのでジロジロ見られたり、差別用語を浴びせられ、泣きながら家に帰ったことが何度もあった。

父は病気を治すために早速通院したが、一向に治らず2年後に亡くなった。家族は大黒柱を失い途方に暮れていた時期が長く続いた。

ついに脱北を決意

北韓では日本語で話すことは一切禁止されていたが、兄弟同士では、いつか日本に帰るために、家の中では忘れないように日本語で話していた。

日本に来て困っていること

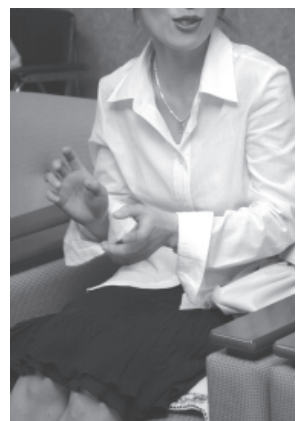
日本に帰ってきて街を歩いていると、2

4時間営業のお店(コンビニ)があることに驚いた。さらに、そのお店のすぐ前で女子高生数名が茶髪でルーズソックスをはいていたのを見て驚き、なお携帯電話ですばやくメールを打っているのにびっくりした。

最初は住むところがなく居候をしていたので非常に困った。また、地下鉄に乗る時に自動改札に変わっていたので暫く離れたところから他の人がやっているのを見てから同じように構内に入った。

さらに、就職する際に外国人登録証を提示すると「無国籍」となっているので詳しく聞かれると北韓から来たとは言えないので適当にごまかしたが、結局は何社か就職試験を受けたが正社員には採用されなかった。今はアルバイトで食いつないでいる状態が続いているが、風邪をひいたり体調を崩すと経済的に将来が不安になる。

昔、日本に住んでいた時は近所の人たちと家族ぐるみで仲良くしていたし、お互いに助け合いながら住んでいた。しかし、現在はアパートでひとり暮らしをしているが、隣の部屋の人たちは挨拶もしない場合が多く、どういう人が全くわからないので違和感を覚えた。アルバイト先でも昔の人間関係とは違い、相手がプライバシーを守る意識が強いせいかな心を開かず、友人をつくるのが難しい。また、夜寝る時になると北韓においてきた子供が心配になり、朝方まで泣く日が週に何日もある。



脱北者プロフィール
 仮名:徐京美(在日同胞)
 関東在住 30歳代 70
 年代に親兄弟とともに北
 韓へ渡り、03年に帰日。

「北朝鮮難民と人権に関する国際議員連盟」第2回総会

8月1日、北韓国民および脱北者の生命を守り、人権を保障するための国際的支援を行う「北朝鮮難民と人権に関する国際議員連盟」(PCNKR)第2回総会が都内で開かれた。

同総会には民主党鳩山由紀夫拉致問題対策本部長、J・デニス・ハスタート米下院議長らのほか、同連盟に所属する韓、日、米、英、モンゴル、タイの国会議員をはじめ、ニュージーランド、オーストリア、ドイツ、北欧諸国の非加盟国国会議員、韓・日・米のNGOの方々を含め多数が参加した。会議に先立ち、共同議長である韓国の黄祐呂氏は、「人



論議し合う各国の国会議員

権問題は多くの国が集い、解決しなければならない。南北関係や統一問題もその内だが人道的支援で北韓の人々を救っていききたい」と挨拶した。



脱北者 シン・ジョンエ氏

午前中の第1部ではNGOによるプレゼンテーションが行われ、脱北し韓国で生活しているシン・ジョンエさんは、「息子が脱北した際に中国から強制送還され行方不明になっているので何とかしてほしい」と窮状を訴えた。

午後には韓国、日本、アメリカ、モンゴルの国会議員が人権問題の討議を行い、北韓への調査団派遣、中国政府への働きかけを強化していくことで一致し、それに伴う共同宣言の採択も行われた。来年7月に予定している第3回総会はモンゴルで行われる。

支援の輪広がる 脱北帰国者支援機構が発足

去る5月23日、脱北者を支援する「脱北帰国者支援機構(坂中英徳代表・前東京入管局長)」が正式に発足した。

記者会見で坂中代表は、日本人と在日韓国・朝鮮人との共生を発展させる未来志向の立場から見ると、最近増えつつきている「脱北帰国者・日本人配偶者」の問題は避けて通れないと述べ、こうした立場から在日韓国・朝鮮人と共に行動する「脱北帰国者支援機構」を設立するに至ったと説明しました。

さらに、「幸せな生活を夢見て北朝鮮に渡った人

たちが、そこで日本以上の差別を受け、脱北という形で日本に戻りましたが、再び不安定な生活と孤独の中められています。こうした姿を見るにつけ、「北送事業」を共に進めた日本側の道義的責任を痛感せずにはおられません」と語っていました。まだ広報体制が整っていない中でもボランティアや様々な支援の申し出が数十件に及んでおり、「脱北帰国者」に対する具体的支援も着々と進んでいるようだ。

今回発足された「脱北帰国者支援機構」とは別に脱北者支援を行っている代表的なNGOである「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」や「北朝鮮難民救援基金」なども活発に様々な活動を展開している。